

私の古本大学

今西 一

今年も恒例の古本市の季節がくる。北海道の大学に移るまでの私は、

古本市への出席を欠かしたことはなかった。そこで親しい人たちと出会って、本の話をするのが何よりの楽しみであった。しかし、二二年間京都を離れていて、すっかり浦島太郎の心境である。恩師や友人たちの何人かは逝去されたり、病に倒れられている。かく言う私も、そう健康とは言えないが、その懐かしい人の代表に、現代史家の松尾尊兌先生がいる。

松尾先生は、必ず初日の朝から古本市に來られて、古本を漁っておられる。まさに漁るといふ言葉が適切で、その間は一切声をかけられないほどの真剣な時間であった。それが一段落して、昼食をとり、家に戻られるまでの数十分間、買われた本の講義が始まる。時には、三冊五百円の廉価本に限るが、「今西君、この

本を買っておきなさい」という指令が下ることがある。松尾先生の本に対する選評が聞けるのが、古本市の最大の楽しみであった。そのなかの一、二のエピソードを書くことにする。

ある日、廉価本で河合栄治郎編の『学生と歴史』（日本評論社、一九四〇年）が出ていると、いつものように「今西君、この本を買っておきなさい」という指令が下った。「この本は、意外と重要な本だ」ということ以外は教えてもらえなかったが、後年、戦後直後の学生運動のリーダー達に話を聞くと、戦時下の旧制高校でこの本を読んで励まされた、という人に何人か出会った。その一人の力石定一氏の話では、これは日本評論社の編集部にいた、石堂清倫氏という日本の代表的なマルクス主義者が、反ファシズム運動として、河合氏を使って意識的に編集したものであった、ということである。まさに本に歴史ありで、そのことをもちろん松尾先生は知っていて、買って読むことをすすめられ

たのである。

もうひとつ私の失敗を書くとき、やはり廉価本で、内藤湖南の『支那論』（創元社、一九三八年）を買って、その内容が戦争肯定的なことをある本に書くと、やはり古本市で松尾先生に会うと、「何年版の『支那論』を使ったのか」と言われ、慌てて一九一四年版の『支那論』を読むと、かなり内容が違っていて、大正デモクラシーの香りのする本であった。しかも湖南は、三四年には亡くなっているのだから、この日中戦争のなかで出された本は、湖南の知らない改訂が行われていたと考えられる。本の書誌は、いかに厳密でなければならぬか、いやと言うほど思い知らされた。昨今のように、大学図書館でも一冊あれば他は処分する、という恐ろしいことが平気でやられるようになってくると、大変なことになってくる。司書も派遣社員で、本のことを全く知らない人が扱っているというのでは、京都市右京中央図書館での桑原武夫先生蔵書の一斉処分事件のようなことは、いつまたく

り返されるかわからないのである。

最後に、少し松尾先生の嫌がる暴露話を書いておきたい。松尾先生が女優の沢口靖子さんのファンであったことは、元同僚の山田稔先生が、『天野さんの傘』（編集工房ノア、二〇一五年）という本で書いているので、これはやめて司馬遼太郎氏の手紙のことに触れたい。松尾先生は、司馬氏の小説『坂の上の雲』での朝鮮の書き方が不満で、あるパーティで司馬氏に「朝鮮がそこにあつたから侵略されたような書き方は問題がある」と批判したそうである。すると実に長文の反省を書いた手紙が来たそうである。生前の司馬氏が『坂の上の雲』を映画化したり、テレビドラマ化するのを拒否し続けた理由のひとつは、そこにあるのではないかと考えられる。

また司馬氏と出会ったパーティというのは、朝鮮史家の姜在彦氏の花園大学への就職祝いで、これも松尾先生の助力によるものであった。松尾先生は、京大の人文科学研究所に朝鮮史の人を入れたいと考えて

いて、姜氏を推薦したのだが、文部

省に姜氏が韓国からの密入国者であること密告する人がいた。松尾先生は渡部徹先生と相談して姜氏に辞表を書いてもらい、そのかわりに京大の文学博士を授与して、花園大学に送り込んだのである。この他に、逆に中国の北京機関に密出国した犬丸義一氏や、大学院に行かなかつた岩村登志夫氏など、在野の現代史家に文学博士の学位を出して、大学に送り込んでいる。このように、いつも在野で苦勞している人に温かい（まなざし）を送っていた。政治家、学者から学生、院生まで知性の劣化が叫ばれる今日、百万遍で松尾先生の古本大学の講義が聞けなくなつたのは寂しいかぎりである。

（小樽商科大学名誉教授）